

P-4 九州歯科大学における教育力評価のための、教育成果の検証および学生の自主学習に関する調査

○豊野 孝^{1,5}、片岡 真司^{1,5}、東 泉^{2,5}、深井 康成^{3,5}、吉野 賢一^{3,5}、
竹内 弘^{2,5}、日高 勝美^{4,5}

九歯大・¹解剖学、²応用薬理、³共基教育、⁴学際教育、⁵大学自己評価部会

本学の教育力評価を行うために、教育成果の検証および学生の自主学習に関してアンケート調査を行った。

歯学部学生を対象としたマークシート方式による調査を、平成24年度から28年度まで年度毎に行った。講義、実習、大学教育に対する満足度、および学生の学習(自主学習の場所と時間)について調査を行い、経年変化を調べた。

大学教育の満足度については、平成24年度から27年度まで満足群(高い、少し高い)の割合の増加が認められた。講義および実習の満足度についても、平成24年度から28年度まで途中増減が認められるが満足群の割合の増加が認められた。自主学習の場所については、平成24年度は自宅と図書館が高い割合を占めていたが、平成28年度では、それらの割合が減少し、自習室(学生食堂)が高い割合を占めるようになった。自主学習の時間については、平成24年度から28年度までを通して、1時間未満が最も高い割合を占めていた。平成28年度においては、1時間未満が45%、2時間未満が23%で、両者を合計すると全体の68%を占めていた。

自主学習の場所が、自宅および図書館から、自習室(学生食堂)へと変化していることが明らかになった。しかしながら、自主学習の時間の増加は認められなかった。今後は、自主学習の時間が増加するように、自主学習の意欲を向上させるような教育、および自主学習の環境の整備を行っていく必要があると考えられた。

P-5 九州歯科大学の個別入試およびAO入試に関する入試実態調査

○豊野 孝

九歯大・解剖学

アドミッションポリシーに沿った、高い資質を有する人材を選抜するためには、入試実態および問題点の把握が重要である。そこで、本研究では新入学生を対象として入試に関するアンケート調査、およびその結果の解析を行った。

平成25～29年度入学の歯学部1年生(歯学科、口腔保健学科)を対象として、マークシート方式による調査を年度毎に行った。個別およびAO入試の難易度(易しい1～難しい5)について5段階評価で調査を行った。本学の志望順位および入学理由についても、選択肢形式の調査を行った。

個別入試の難易度の平均点は、歯学科では平成25年度から少しずつ低下し、平成28年度では2.51であったが、平成29年度では2.88と増加した。口腔保健学科では平成25～29年度にかけて難易度3.5前後で増減が認められた。AO入試の難易度の平均点は、歯学科、口腔保健学科において平成25年度は、それぞれ2.9および3.0であったが、平成25～29年度にかけては、それぞれ3.3および3.7前後で増減が認められた。志望順位については、歯学科、口腔保健学科において、1位が第1志望で、2位は歯学科では志望先ではなかった、口腔保健学科では第2志望であった。入学理由については、歯学科、口腔保健学科において、1位が「歯学または口腔保健学に強い興味があった」であった。2位は歯学科では、「自分の能力レベルに相応」、口腔保健学科では「専門的な資格取得のため」であった。両学科において、1位、2位ともに昨年と同一であった。

歯学科の個別入試の難易度の平均点が、平成28年から29年度にかけて増加が認められた。今後はこの難易度の増加の要因を調べていく予定である。